No.84
2020. 12.1

地球の木

地球上のすべての人たちと共に生きたい

CONTENTS

■地球の木講座2020「SDGs時代とコロナ禍の国際協力とは？」……1,2
■「多文化共生の地域づくり」オンライン連続講座……3
■支援地から（ネパール）……4
■支援地から（ラオス）……4,5
■支援地から（カンボジア）……5
■鎌倉女学院高校「国際セミナー」／ラオス勉強会／ロシラハールを読む会……6
■気仙沼だより／地球の木と私／活動日誌……7
■インフォメーション（年末募金／地球の木カレンダー／イベント情報）……8
■編集後記……8

SDGs時代とコロナ禍の国際協力とは？

地球の木講座2020 ～10月10日 オンラインで開講 ～

講師 大橋 正明さん

今回講師にお招きした大橋正明さんは、長年、日本の国際協力NGOを牽引されてきました。地球の木の会員の皆さん、つながりのあるNGOの方、学生さんなど、約50名の方々がオンラインの講座に参加しました。大橋さんの40年にわたる豊かな経験、またそれに裏づけられたお話は、私たち海外支援を行うNGOや興味ある人たちにとって示唆に富んだものであり、いろいろなことを気づかせてくれました。熱い思いを感じる少々早口でのお話を聞き漏らすまいと耳を澄ますうち、あっという間に時間が過ぎてしまいました。

今講座は、大橋さんと磯野理事長との対話形式で行われましたが、大橋さんは、磯野理事長が冒頭で「この方から国際協力のあり方を学びました」と述べている恩師でもあります。

■国際協力に関わるきっかけとその活動

1970年代の学生運動に参加したものの内部の問題で嫌気がさし、1974年たまたま渡ったインドがきっかけになりました。路上にはたくさんのバングラデシュ難民があふれており、貧困に苦しむ子どもたちをなんとか助けたいと思うようになりました。今まで見たことのなかった世界に興味を覚え、インドに留学しヒンディー語を学びました。帰国後、友人がいた「シャプラニール＝市民による海外協力の会（以下、シャプラニール）」での活動を始めます。バングラデシュ駐在員や事務局長をつとめ、識字教育などのプロジェクトを行いました。しかし、きちんと開発学を学ぶ必要を感じ、シャプラニールを辞めてアメリカで2年間学んでバングラデシュに戻り、今度は国際赤十字社（バングラデシュでは赤新月社）の活動を担いました。

コソボ難民支援、ロヒンギャ難民支援などにも関わってきましたが、難民が生まれるのは政治の問題であり、所得格差や貧困が生まれるのは社会の構造の問題そのものです。NGOが現地で絆創膏を貼る（いいことをする）だけではだめであって、それを生み出している問題にも物を申していくことが大切です。

■活動された40年で世界はどう変わったか？

全世界的に食べるものがないという飢餓はほとんどなくなったと言えますが、格差が大きく広がり、人権が守られないということは減っていません。形を変えた貧困が広がり、社会問題の質が変わってきています。

NGOが担ってきた役割は、社会の流れを変えることであり、まさにパイオニアです。NGOそのものが問題を解決できるわけではありませんが、声を上げ続けてきた結果がSDGs（持続可能な開発目標）につながり、国際社会全体をそちらに向けてきたのだと言えます。

■コロナ禍が途上国に与えた影響は？

インドやバングラデシュの新聞記事によると、明らかに貧富の差が開き、貧困層が増えています。父親の収入が減り、学校も休みとなり口減らしのために、チャイルドマリッジ（子どもの結婚）が増えているといわれています。国連も、今後極端な貧困に落ち込むことを予想しています。このまま貧困が拡大し、様々な悪影響が出ることを懸念しています。

■発行 特定非営利活動法人 地球の木 理事会 ■発行責任者 磯野昌子 ■編集 会報作成チーム ■事務局 〒231-0032 横浜市中区不老町1-3-3フェニックス関内2F
■TEL 045-228-1575 ■FAX 045-228-1578 ■E-Mail:chikyunoki@e-tree.jp ■http://e-tree.jp/

地球の木講座 Zoom画面から

■SDGsとは？

2000年にMDGs（ミレニアム開発目標）というのが国連で決められました。それは7つの目標からなり2015年までに途上国の貧困問題を改善しようというものでした。そのMDGs を引き継ぐものとして、2015年9月の国連サミットで加盟国・地域の全会一致で採択されたのが、「持続可能な開発目標」(Sustainable Development Goals: SDGs[エス・ディー・ジーズ])であり、2030年を達成期限とする17のゴール、169のターゲット、および、その進展を評価するための指標を持つ包括的な目標です。SDGsがめざすところは、「世界の貧困をなくす」ことと「持続可能な世界を実現する」ことであり、途上国だけではなく、日本を含む先進国もその達成が求められている、普遍的な目標です。（一般社団法人SDGs市民社会ネットワークのホームページより抜粋）

また各国がそれぞれの状況に合わせて基準を作っていいことになっています。SDGsは地球社会が抱える様々な問題に対する「処方箋」が書かれていますが、なぜそうなってしまったかの原因や理由には言及されていません。見る人によって、解釈の仕方によって理解は様々で、まるで「万華鏡」です。

私たちは、SDGsのかけ声となっている「誰も取り残さない」ということを忘れずに、テコとしてうまく使っていくことが大切だと思っています。

■コロナ危機でSDGsはどうなる？

「新型コロナへの緊急事態への対処を優先して、落ち着いたらSDGsに改めて取り組むべき」と考えてしまうのは間違いで、「グローバルな危機である新型コロナ感染症に取り組むためにこそ、SDGsを活用すべき」です。

SDGsの基本は、誰も取り残さないこと。グローバルな伝染病は、グローバルに取り組んで、患者の誰も取り残さないことです。WHOも世界中で協力すべきと呼び掛けています。

SDGsの3つ目の目標には、「2030年までにエイズ、結核、マラリアなどの伝染病を根絶するとともに肝炎など感染症に対処する」また「すべての人々に対する財政リスクからの保護、質の高い基礎的な保健サービスへのアクセスおよび安全で効果的かつ質が高く安価な必須医薬品とワクチンへのアクセスを含む、ユニバーサル・ヘルス・カバレッジ（UHC）を達成する」と書かれています。UHCは日本が提案しました。

ワクチンができた時に、一体ロヒンギャ難民やコソボ難民のワクチン代金は誰が払ってくれるのでしょうか？お金のある国の国民だけがワクチンを受けられるのではなく、貧しい国が取り残されることがないよう、ワクチンの提供の仕方が問われています。SDGsの考え方で誰も取り残されず解決されなければなりません。

■私たち小さなNGOにできることは？

いわゆる大きなNGOは、プロジェクト資金の大半を外務省、JICAなどからもらってやっている場合が多いですが、それらのプロジェクトの大半は、期間が区切られており住民のニーズからかけ離れがちです。橋や道路などのインフラ建設なども大切なことなので、それらは大きなところにお任せしておけばよいのです。

地球の木のようにそういった資金を貰っていないNGOは、困っている人、権力を奪われている人などを、制度ができるまでの間、顔の見える関係で福祉的アプローチとしても関わっていくことができるのではないでしょうか。それはプロジェクトにはならない小さなもの、プロジェクトにはなじまないものです。グローバル市民として、同じ生活者として繋がりながら中長期的に関わっていければよいと思います。その中で声を出していけたらいいのではないでしょうか。

大学で教鞭をとられるようになってからも30年、「2足のわらじ」でさまざまなNGOに関わってこられた大橋さんの話に引き込まれました。最後に質疑応答がありましたが、その中にあった大橋さんの言葉「あきらめないこと。少しでも声を出し続けること。」を私は胸に刻みました。

（会報作成チーム　沼田 由美子）

〈大橋正明さんプロフィール〉

1953年東京生まれ。聖心女子大学現代教養学部人間関係学科教授。聖心グローバル共生研究所所長。
一般社団法人SDGs市民社会ネットワーク代表理事など。

ロヒンギャの民家で村人と語る大橋さん

「多文化共生の地域づくり」オンライン連続講座

地域に暮らす外国籍の人たちと共により良い社会づくりを目指すにはどのような活動が必要なのだろう？その答えを求めて、オンライン連続講座を展開中です。先ずは神奈川県で暮らす外国籍の人たちの声を聞こうと、8月27日に第1回「リタさんに聞いてみよう！日本での暮らし」と10月6日に第2回「メラニーさんに聞いてみよう！ 日本での暮らしと地域とのつながり」をZoomで開催しました。

リタさんに聞いてみよう！ 日本での暮らし

念願の博士号を取りました！

タパ・リタさんと地球の木の出会いは、2006年に実施したネパールYOUTH交流スタディツアーの時でした。当時リタさんはネパールの地球の木の支援地で地域活動を行うユースクラブの会長でした。その彼女が2014年に来日し、日本語学校を経て大学院に入り、今年3月に環境分野で博士号を取得しました。

たくさんのネパール人が外国に出稼ぎ、または留学している背景を尋ねました。リタさんによると、最近は大学に行く人が増えてきたが、ネパールの大学を出ても就職先がないことが大きな理由です。出稼ぎの場合は仲介料が安いカタールやサウジアラビアなど湾岸諸国の都市に行き、留学組はヨーロッパやアメリカ、日本などの先進国に行く人が多いそうです。留学の場合、借金をして渡航費や仲介料などを捻出し、就職したら返すつもりで海外に出るとのことですが、留学先では物価が高いので、アルバイトをしても生活費で消えてしまいます。

文化も習慣も違う日本での生活は、ワクワクとドキドキの入り混じったものでした。Suicaで改札を通る電車の便利さに目を見張り、アルバイト先のレストランでは掃除機を渡されてびっくり。ネパールでは先生だったのに、掃除をしなくてはならないと悲しくなりましたが、どんな仕事も大切な仕事と割り切り、夢を実現しようと頑張ったそうです。アルバイトと勉強の毎日。大学院の研究も苦労の連続だったようです。

「留学生を受け入れるなら日本の制度や待遇をより良いものにし、学んだ経験や知識を国に帰って活かせるようにしてほしい」とリタさんは最後に訴えました。

メラニーさんに聞いてみよう！ 日本での暮らしと地域とのつながり

高橋メラニーさんは、28年前にフィリピンからエンターテイナーとして来日。シングルマザーとして2人の息子さんを育て、自立するため、介護ヘルパー、運転免許、認知症介助士など数多くの資格を取りました。現在は再婚され、娘さんと共に地域の活動にも積極的に参加しています。

そんなメラニーさんが一番困ったのは病院でした。そこで使われていた言葉は普段の会話と全く違っていました。妊娠から出産まで、不安がとても多かったそうです。さらに子どもが生まれて予防注射を受ける時、何を注射されるか分からないままサインをしなくてはならない恐怖を語ってくれました。そのような経験をする人が少なくなるように、医療通訳、学習支援など多くの活動に取り組んできたメラニーさんのエネルギーに圧倒されました。

自分の住んでいる所がこれからも生きる所と、地域の中にも飛び込んでいきました。いきなり子ども会の会長に。でもそのおかげで地域の人たちと仲良くなり、他の活動にも声がかかるようになりました。娘さんと地域のお囃子のグループに入り、得意の折り紙でポスターを作るなど、「諦めないこと」が大事と、何でも前向きに取り組まれています。

慣れない日本に住んで不安を抱えている若いママさんたちのために、悩みを話せる場所があると良いと話してくれました。

オンラインでこんにちは。(左から丸谷さん、メラニーさん、大嶋さん)

講座で心に残ったのは、「日本に来て本当の友だちができない」というリタさんの嘆きと、「近所の人でも挨拶をしない人が多い」というメラニーさんの言葉。外国人を受け入れる側の私たちも変わらなくてはならないのでは、と気づかせてくれたオンライン講座のゲストたちでした。

(多文化共生の地域づくり準備会　丸谷 士都子)

from Nepal

カマルさんの現地レポート

ロックダウンが解除され、やっと支援地マンガルタールに行くことができたパートナーNGO・SAGUNのカマルさんの現地レポートをお届けします。

ナマステ。

ネパールのコロナの状況は日を追うごとに悪くなってきています。10月29日までの感染者は16万400人で、そのうち876人が亡くなっています。全感染者の74%にあたる11万8,843人は回復していますが、感染者数と死亡率が増えていくことに人々は混乱し怯えています。しかし、様々な関係者がコミュニティレベルでこの状況に立ち向かおうとしています。

訪問中、様々な人と「コロナによる被害を受けた人々に対して何ができるか」を話し合いました。ネパール政府は混乱を回避するため全ての地方自治体に救援物資の配布窓口を一つにするよう要請しています。地方政府も2015年の大地震の時のように村人の間に争いが起きるのを恐れ、様子見の状況です。

うつや自殺者がネパール中で増えており、マンガルタールのあるロシ地域も例外ではありません。今回の訪問で、地方政府が専門家の協力を望んでいることが分かりました。ローカルファシリテーターのムクさんも交えて話し合った結果、以下の計画を立てました。

A. 地方政府や、ヤギ飼育グループなど地域の組織と密に連絡を取り合い、定期的にコロナや財政状況を更新する。

B. 医師、看護師、保健師など専門家をロシに連れていき、コロナに関する専門的な知識を地方政府・地域の人々と共有し、混乱を防ぐ。

C. 地域の人々にソーシャルサポートを行う。カウンセリングのできる公衆衛生の専門家を2ヵ月間マンガルタールに派遣し、村人の支援に当たってもらう。

特にCの「心のケア」は、今一番必要とされている支援であり、マンガルタールの人々の大きな救いになるので、地球の木にご協力をお願いしたいと思います。ほとんどの世帯が仕事を失ったり事業ができなくなったりで、経済的な打撃を受けています。野菜農家や酪農家はロックダウンや車両規制のため販売の道を断たれています。私たちは地方政府と共に*より持続可能な収入創出プログラムを考えなければなりません。

地球の木の大きな貢献に感謝します。

＊ネパールでは、NGOの活動はすべて社会福祉協議会の許可をとり、地方政府と協働で行うことになっています。

from Laos

農村部への負の影響を懸念

新型コロナウィルスが世界的に流行する中、ラオスでこれまでに確認された感染者は10月21日現在で24人、首都ビエンチャンなどの都市部に限られており、活動地では報告されていません。農村部では未だ食料自給度の高い暮らしが営まれており、親族との間や村の中で互助のしくみがあるためか、たとえ移動の制限などによって外部から食料が入ってこなくなっても、混乱は起きていないようです。

しかし一方で、農村部住民の暮らしにもこれからだんだんと新型コロナウィルスの間接的な影響が出てくる可能性があります。輸出入が滞り大規模開発プロジェクトが一時停止されたことなどにより、金融面での信用状態に関するある格付けでは、ラオス政府は債務危機状態にあるという報道がなされています。ラオスではかねてより大規模開発プロジェクトが経済を支える一方で、これらに伴う深刻な森林破壊、土壌や河川の汚染、地域住民に対する補償のない土地の収用や強制移住などが生じ、森や川からの恵みに支えられた農村の人々の暮らしが深刻な影響を受けてきました。今後、大規模開発プロジェクトが無理に進められることにより、農村部への負の影響が拡大することが懸念されます。

JVCラオス事業は、農村部の人々が自分たちの手によって村の周りの自然資源を守っていくための支援をおこなってきました。村人たちを取り巻く環境がこれからどのように変化し、どういう影響が出てくるのかを注視しつつ、人々の安心した暮らしの一助となるよう、更なる活動を続けていきたいと思います。

（JVCラオス駐在員　山室 良平）

―JVCラオスチームの会報に寄せられた報告から抜粋転載―

マスク着用で行われた村での研修

リモートでクラフトの買い付け

前号の会報誌で、カンボジアはコロナ感染者が少ないと書きましたが、相変わらず少数で死者はゼロとのことです。海外からの帰国者が持ち込む例がありますが、水際で抑えられています。

地球の木では、今まで毎年1～2度カンボジアを訪問し、支援先のCWCC（カンボジア女性緊急救済センター）の活動内容を聞くと共に、生活クラブ生協や福祉クラブ生協の共同購入、デポーやイベントでの販売用にクラフトの仕入れも行っていました。

クラフトの仕入れ先は、現地の人たちが立ち上げた、障がいのある人やシングルマザー、地雷の被害に遭い体が不自由になった人たちが自立していくために、縫製や刺繍などの作業をしているお店です。彼らは作った品物が売れることで、収入を得、将来の夢が持てます。子供の教育費にしたり、家を建てたり、自分のお店を持ちたいと目を輝かせる人もいます。私たちは、作っている人たちの様子を聞きながら、購入をしています。

昨年2月以降、1年半訪問することができずにいたので、今年こそはと訪問を予定していましたが、新型コロナウイルスで渡航不能となってしまいました。そこで、助っ人のディナさんに、「買い付けをしたいので、普段クラフト類を購入しているお店の様子をスマートフォンで撮ってもらいたい」とお願いしました。

ディナさんはお店に着くとZoomで地球の木事務所とつなぎ、お店の中を映し、私たちが、映像を見ながら、「あっそのバッグ！それ！もっと右の」「他も見せて！」「いくら？どんな色がある？大きさは？」などなど6時間かけて4店舗回ってもらいました。

竹ストロー、カフェでも使っているよ

その中でこんなものもあるよと「竹でできたストロー」をみせてくれました。カンボジアにはこういった細い竹が生えています。なんとブラシもついています。脱プラスチックで、カフェでも使われているそうです。このストローも購入しました。ささやかなことかもしれませんが、意識を変えるきっかけになる取り組みですよね。　（カンボジアチーム　成瀬 悦子）

ラオスに暮らし ① ラオスで食べる

JVCラオス事務所に赴任した夫君に同行してサワンナケートで暮らして1年半の筆者、ラオスでの食料事情をつづります。

週に1度、街でもっとも大きな市場「タラートサワンサイ」で食材の買い出しをしています。市場が営業を始めるのはまだ陽の昇らない午前4時頃。毎日午前中いっぱいは多くの人で賑わいます。エネルギーに溢れ、行く度に新しい発見のある市場での買い物は、ラオス生活における私の大きな楽しみです。市場に並ぶラオス独特の食材やラオス料理については書籍やネット上にも多くの情報がありますので、ここではあえて、私がラオスで日本食を作る際に使う食材をご紹介したいと思います。

まずは野菜類。季節にもよりますが、ゴボウやカブなど一部のものを除いて、日本で一般的な野菜の多くが購入可能です。沖縄野菜とされることも多い青パパイヤ、ヘチマ、シカクマメなどは、ラオスに来てから食べる機会がぐんと増えました。日本ではなかなかお目にかかれない野菜もありますが、中でも広東菜は日本食にも使い易いヘビロテ葉物野菜です。10種類以上並ぶキノコの中でわたしのお気に入りはフクロタケ。濃厚な味と香りの生のフクロタケは、炒め物やスープだけでなく、炊き込みご飯にも絶品です。

加工品の種類も豊富です。ずっしり重い固めの豆腐や厚揚げのほか、さつま揚げの代用品になる魚の練り物なども手に入ります。乾物の豆類もありますので、小豆であんこを練ったり、おせちの黒豆を煮たりすることも。最近では、乾燥大豆を使った納豆づくりにも挑戦しています。　（岩田 桃子）

―JVCラオスチームの会報から抜粋転載―

出前講座

鎌倉女学院高校 ～国際セミナー～

今年度はコロナ禍のために開催が危ぶまれたが、やっと10月31日に実施された。例年の会場（湘南国際村センター）ではなく学校でとなった。コロナ対策が慎重になされ、参加生徒の人数は1クラス12～13人ずつ（通常は約30人）で、ソーシャルディスタンスを保ちながらの着席。全員マスク着用なので話しにくいし聞きにくい場面もあったが、生徒たちは元気で活発に参加してくれた。

２種類のワークショップを午前1コマずつ、午後1コマずつ実施した。

◆ネパールタルー族の家族ゲーム

例年は識字体験の家族ゲームの後、「デブラニ物語」の紙芝居（2009年作成）で講座を終えたが、題材が古くなり検討していたところ、10月に当時の村のリーダーたちとZoomでミーティングが持てた。私たちが支援していた人たちの現在の成長・自立の姿を知ることができ、生徒たちに識字教室で学んだ“デブラニさんのその後”を話すことができた。（15歳から識字教室で学び、大学進学、先生になり、現在は起業している）。女性たちの自立の様子の一端を紹介でき、生徒たちに刺激や勇気を与えることにもなったように思う。

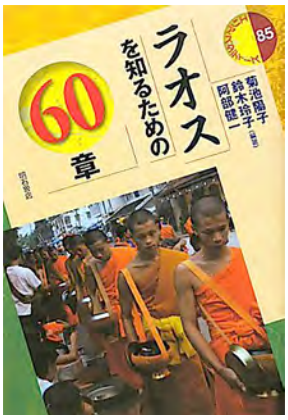
◆未来の食卓

「食品ロス削減推進法」が施行されて、ちょうど１年。偶然、ワークショップ前日の10月30日は「フードロス削減の日」で新聞でも大きく扱われていた。いつもの展開に加えて、フードロス問題を強調しながら、飽食と無駄の裏側にある生活困窮者の問題やSDGｓにも触れて、生きてゆく基本である食の未来のあるべき姿、自分たちにできることは何かなどを発表しあった。問題意識旺盛で発表の仕方にも慣れていて高校生らしいまとめができたと思う。

（出前講座チーム担当理事）

ラオス勉強会

『ラオスってどんな国？』



サバイディ、ボー？ お元気ですか？

ラオスチームはこの度ラオスの勉強会をオンラインで始めました。JVCの活動報告は会報でお知らせしていますが、その上で、もっとラオスという国や人々の暮らし、自然観などについても皆さんに知って頂きたいと思います。どんなことをするのかといえば、多面的にラオスを紹介している本をテキストに、ラオスチームが今まで現地に行って実際に見てきたこと感じたことを加えたり、写真や動画を見たりしながら理解を深めます。気楽に意見を出し合いながら、ラオスという国のジグソーパズルを完成させませんか？ ラオスに関心のある方、ラオス初心者の方、大歓迎です！ お試し参加もどうぞ。

【日時】毎月第1か第2木曜日13時30分から15時頃まで（2021年3月まで継続予定）
【場所】Zoomにて。事前にお申込みいただいた方にURLをお知らせします。
【申し込み】地球の木事務局　【参加費】無料　【使用テキスト】『ラオスを知るための60章』明石書店 2,000円＋税

「ロシラハールを読む会」に参加しませんか

ネパールチームでは数ヵ月に一回、「ロシラハールを読む会」を実施しています。『ロシラハール』は地球の木の支援地、ネパール東部のロシ村で「幸せ分かち合いムーブメント」のコンセプトを人々に知ってもらう目的で発行している地域情報誌です。野菜作りや収入創出プログラムの成功例、作文コンテストの入賞作品、ヤギが病気になったときの手当ての方法など地域密着の話題を人々に伝えています。

ネパールチームではこのネパール語で書かれた情報誌をJICA海外青年協力隊としてネパールに赴任されていた菅野冴花さんを講師に迎えて翻訳していただき、今現在のこの地域の話題と課題を参加者で話し合い、地球の木の支援のヒントにしています。

コロナ対策が必要な現在、オンラインで行っています。ご興味のある方は是非ご参加ください。

『ロシラハール』最新号

【日時】12月14日（月）13時から14時30分まで
【場所】Zoomにて。事前にお申し込みいただいた方にURLをお知らせします。
【申し込み】地球の木事務局　【参加費】無料

気仙沼だより その25

2020年の生活クラブ生協神奈川主催”東日本大震災復興支援まつり“はオンライン開催となりました。そのための動画を作成するために気仙沼を訪ねました。

現地では、津波の被害を受けた所は工事が終了。船着き場のかさ上げ工事も終わり、多くの船が係留されていましたが、あとで聞くとサンマが不漁で漁場に行けない船が多かったようです。おしゃれな商業施設ができていましたが賃料が高いとか。

防潮堤の工事はつづく（2020年９月）

復興住宅も素敵なマンションですが、人生のほとんどを戸建てで過ごし、道行く人と気軽に声を掛け合っていた生活から、出かけるのもおっくうになる４階建てのマンション暮らしには、なかなか慣れないようです。

気仙沼高校跡が東日本大震災遺構・伝承館となり、学生たちが修学旅行で訪れていました。また道路を挟んだ向かい側はおじ様たちが簡単にゴルフを楽しめる場所になり、その先は海が全く見えない高い防潮堤が続いていました。今回の訪問で、どんどん生活が変わっていく中で懸命に生きていこうとする人々の様子を感じました。

このような地域の状況を変えていこうと、Tree Seedは、以前の“こどもリーダー”の組織を再生したいと考えています。地球の木としてもできることを聞き、2018年に「カカオ（チョコレート）ワークショップ」を現地で開催してきました。事務所では、若者たちが集えるカフェが運営されています。

このワークショップで使っていたチョコレートのカカオを生産しているインドネシア・パプア州の若者が作ったカフェ“カカオ・キタ”と、Tree Seedのカフェ“Alice Box”をつなぐZoomイベントが10月3日実現しました。カカオを通じてパプア州の地域開発に尽力している若者たちと、気仙沼の、人と人をつなぎ地域の復活を模索しているTree Seedの小野寺さんたち若者が、これからのことについて画面を通じて”今”の話で盛り上がりました。コロナ禍で生まれた“これから”がつながる楽しみができました。

（理事　廣瀬 康代）

地球の木と私

これからも弱い立場の人たちと一緒に

「ランチ1食500円の国際協力！」の呼びかけで地球の木の会員になって30年になります。当時は子育て真っ最中で、アジアの貧しい女性や子供、特に学ぶ機会のない女の子のことなど考える余裕はありませんでした。そんな私にも協力できることがある。1人が500円の寄付でも、集まれば大きな力になり援助できることがわかり嬉しかったのを覚えています。

その後、地球の木の理事になる機会をいただき、支援しているラオスの状況を見に行くことができました。若者が米つくりを学び集落で共同で作っていました。ニワトリは放し飼いで日本の少し前の時代とよく似た風景があり、懐かしくなりました。川で魚の養殖を始める計画が話し合われていました。援助する事で夢が現実となり少しずつ豊かになっていく様子がわかり、私の500円が本当に役に立っていることを実感することができました。

今はインターネットでどこでも繋がれるようになり、様々な情報がすごいスピードで動いています。私たちが出来る援助も変わってきているのかもしれません。でも、1番大切なのは、困っている人に何が必要か、相手の身になって考えることを忘れない。その時だけでなく、自立できる持続可能な援助であることです。これからも、より弱い立場の人たちと一緒に活動する地球の木の会員であり続けたいと思います。

（川崎市多摩区　豊田 由紀子）

活動日誌（9月～11月抜粋）

9月

19日	第４回定例理事会*
26日	デポー展示会（東寺尾）
28・29日	デポー展示会（緑園）

10月

6日	第2回多文化共生の地域づくり連続講座*
10日	地球の木講座2020「SDGs時代とコロナ禍の国際協力とは？」*
12日	デポー展示会（市が尾）
17日	福祉クラブ生協展示会（鎌倉）
24日	第5回定例理事会*
25日	第3回多文化共生の地域づくり連続講座*
31日	鎌倉女学院高校 出前講座

11月

5日	中間監査
〃	デポー展示会（大丸）
7日	真光寺中学校 出前講座
14日	東日本大震災復興支援まつり2020*
20日	デポー展示会（南林間）
21日	第6回定例理事会*
29日	ひらつかボランタリーフォーラム

*オンラインもしくはオンラインを併用して開催

2020年地球の木 年末募金

コロナ禍の今、助け合いの輪を広げよう！

皆さまの日ごろのご協力に心より感謝申し上げます。今年も残りあとわずかになりました。新型コロナの影響により今年度は現地での調査や交流は実施できませんでしたが、オンラインやメールでのやり取りのなかで、現地の様子を知ることができました。ラオスやカンボジアではコロナ感染は少ないようですが、油断はできない状況です。経済的な格差拡大が世界的な問題となっている今、さらに差別や分断を広げないためにも、これまでどおりの支援を継続しながら、人々の声を聴いていきます。

どうぞ、1口1,000円（何口でも）のご協力をお願いいたします。詳細はホームページ、または、チラシをご覧ください。年末募金は2021年1月31日まで受け付けています。

日本国際ボランティアセンター提供

ラオス ナライドン村の田植え風景

「地球の木」カレンダー2021 好評発売中

「私は、おもう。～Here, There, Everywhere～」

写真 堀 潤　氏

サイズ
［壁掛け］32cm×38.5cm
（使用時60cm×38.5cm）
［卓　上］15.5cm×17.8cm×7.5cm

制作元 日本国際ボランティアセンター（JVC）

価格
［壁掛け］1,600円（税込）
［卓　上］1,300円（税込）
※カレンダーの収益は、地球の木の国際協力活動に使われます。

寄付領収書について

地球の木へのご寄付は、所得税等の控除対象になります。寄付金控除を受けるためには、地球の木が発行する「寄付金受領証明書」（領収書）を添えて確定申告することが必要です。2020年の領収書は確定申告に間に合うよう、2021年1月下旬にお送りいたします。

また、地球の木ではサポート会員の会費も寄付金控除の対象になります。サポート会員の会費はご連絡いただいた方のみ領収書をお送りしておりますので、必要な方は事務局までご連絡ください。

デポー展示会

12月3日(木)　つなしま

編集後記

◆学術会議の任命拒否。とんでもない！とネット署名した。署名者数は10日間で14万人に。片や横浜市のIR招致の賛否を問う住民投票を求める署名活動。町内の知り合いを一軒一軒訪ねて、やっと100筆。ネットのすごさに驚きつつ、久しぶりに人と会う楽しさを味わった。　（NK）

特定非営利活動法人 地球の木 EARTH TREE